

二人でやっと一人前

二瓶宗一郎さん（大正15年生 三島町）

二瓶順子さん（昭和6年生 三島町）

「ふたり居だから、まとまった」。

「はぁもう、忘れちゃったが、やれば思い出すべえ。」

隠居生活のおふたりに無理を言って、今では使う人もなくなり、作り方を覚えている人も貴重な、雪踏み俵の作り方を教えてもらった。

ぼーっと見ていた宗一郎さんが、順子さんが迷って手を止めると、すかさず手を出し、自分のやり方で先を繋いでくれる。

静かに見ていた順子さんが、宗一郎さんの間違いに気づき、必ず後から“こっそり”裏で修正部分を教えてくれる。絶対に直接間違いを指摘しない。

宗一郎 「こう結んでこう留める」。

順子 「そうでねえべ。こうして、こうだ」。

宗一郎 「こうして、こうだべか」？



時にはふたりの記憶が行き違い、言い合いになることもある。折れるのは必ず順子さんだ。

役割分担もあって、側面のこも編み部分は順子さん、接続と全体調整は宗一郎さんだ。

そんなふたりのやり取りと記憶の行ったり来たりを繰り返しながらも、雪踏み俵は形になった。

いつも一緒のふたりの、仲良くいるコツは何ですか？

宗一郎 「文句は言うけど、喧嘩はしたことない」。

順子 「言いたいことは何でも言う」。

宗一郎 「忘れることも大事だあ。怒りが長持ちしないからな」。

順子 「頼り、頼られること。二人でやっと一人前」。



自分ひとりでできることなんて限られている。

足りない部分を補ってくれる存在があるから、何とか生きていけるのかもしれない。

自分の限界を知って弱みを認め、得意なところは頑張る。

相手の至らないところには手を差し伸べ、得意なところには頼る。

埋もれるくらいの大雪を、雪踏み俵でしっかり踏み固めて、3人の子供を育ててきた。

それが今では3世帯9人で暮らす大家族の、年寄じいちゃんと、年寄ばあちゃんだ。きつい野良仕事も、深い雪の中での材木出しも、夜遅くまで仕込んだ藁仕事も、子供を育てるために一生懸命働いた。



ふたりの手の記憶を頼りに作った雪踏み俵は、きっと、かつての力強さはなく、歪んでいた。ちょっと左右が不均等で、頼りない傾きもあった。

しかし、両足に履いて雪を踏むと、ざくっざくっと雪は踏み固められ、少しずつだが道ができた。

左右両方が揃って初めて用をなす雪踏み俵は、いつまでも、二人で一人前の宗一郎さんと順子さんの姿だった。



16時、今日も手押し車を押しながら、ふたりは一緒に、散歩に出かける。